

<研究ノート>

深層心理学と宗教

沼田 健哉

1 はじめに

フロイトによって始められた精神分析学，さらにその影響下に成立したユングの分析心理学は，いずれも心理療法と密接な関連をもっている。それは「医学であって同時に心理学」であるという側面をもち，心理療法家は，魂の医者といえる。新フロイト派の立場にたつエーリッヒ・フロムは，現在僧侶と精神分析家という，二種類の専門家が魂を問題にしているとみなし，その相互の関係について考察を加えている。

以下の論述においては，フロイト・ユング・フロム等が，宗教，もしくは宗教と精神療法の関連について，いかなる見解を有しているかを記述し，さらに若干の考察を行なうことにしたい。

2 フロイトの宗教論

フロイトは，「トーテムとタブー」において独自の宗教論を展開している。それによれば，原初的な人間社会は，強力な父親によって導かれた息子たちの集団であり，ある時，息子たちが団結して父親を殺し，女性たちを奪い取った。その悔恨の情により，殺した父親を崇拜の対象とするにいたった。トーテムは，殺された父親の象徴であり，族外婚と，トーテム殺害を禁ずる禁忌は，その命令の表現である。又，トーテム動物共食の祭儀は，父親殺しの象徴的再現であるとされる。

さらにフロイトは人間の世界観の発段階を、個人のリビドー発達の段階と比較する試みを行なっている。それによれば、時間的にも内容的にも、アニミズム段階は自己愛に、宗教段階は、両親への結びつきにより特徴づけられる対象発見の段階に対応し、科学段階は、快感原則を放棄して、現実に対応して外界に自分の対象を求める、個人の成熟状態に対応しているとされる。¹⁾

ついでフロイトは、「幻想の未来」において、宗教批判を行なっている。彼は、文化の財産目録のなかで、いちばん重要なものは、広い意味の宗教的表象であり、それは他の言葉でいえば、幻想 (illusion) であるとする。²⁾ 神々には、三つの任務があり、それは、自然の恐怖を封ずること、運命の残忍さ、とくに、死についてのそれを和らげること、および、文化の要請する共同生活が人間に与える悩みや欠乏を補償することである。³⁾

神に対する人間の関係は、ちょうど父に対する、小児の親密さと強情との再現であり、神とは、高められた父であって、宗教的諸要求の根源は、父への憧憬にある。小児の頼りなさが、そのままひきつづいて、大人の頼りなさになり、父親憧憬の動機というのは、人間の無力の結果に対して、保護を要求することにほかならない。⁴⁾ 宗教の教えが、内的体験による以外には、真実性を証しえないものとすれば、そういう体験をもたない多くの人間は、どうすればよいのだろうか。

宗教観念なるものは、実は幻想なのである。幻想の特質とは、かならず人間の願望から発していることにあるが、それは、かならずしも、実現不可能もしくは反事実であることを必要としない。ある信条が、やみがたい願望の

1) フロイト吉田訳「トーテムとタブー」『改訂版フロイト選集第6巻文化論』日本教文社、1980年282頁

2) フロイト吉田・土井訳、「幻想の未来」『フロイト選集8、幻想の未来』日本教文社、1968年、18頁。

3) 「同書」23頁。

4) 「同書」26～34頁。

充足を動機としている場合に、それを幻想と名づける。宗教教義は、ことごとく幻想であり、証明不可能なものである。したがって、だれに対しても、それを真実と思うことや、それを信奉することが強制されてはならない。科学は、今日においてもまだ、多くの問題に解答を与えるにいたっていないが、それでも、われわれを真実の認識へと導びきうる唯一の道は、やはり科学なのである。⁵⁾

宗教をあるがままに持続することは、これを解消することよりも、もっと大きな危険を文化に与える。⁶⁾これに対し、精神分析は、一つの研究方法であり、不偏不党の道具であって、微分積分学とちがわない。⁷⁾ 宗教は、たしかに、非社会的衝動の制御に大いに貢献した。宗教は、数千年にわたって人間社会を支配してきた。しかし現在においては、おそるべき多数の人が、文化に不満足であり、不幸であり、文化を桎梏と感じている。宗教をもって、人類になくてはならないとするのは、過大評価ではないのか。⁸⁾ 宗教は、もはや人間に対して、昔ほどの影響をもっていないといわれるが、それは、信じることの価値が、昔ほどには大きく考えられなくなったからである。この変化をひきおこしたものは、社会の上層部における科学精神の強化である。⁹⁾

宗教というものは、人類一般の強迫性神経症だということができる。なぜなら、それは、小児のばあいと同じく、エディプス・コンプレックスから生じているのであるから。この見解から、宗教からの離反というものは、成長過程の運命的不可抗性によって実現されるべきものであり、現代がちょうど、その発達段階にあるのではないだろうか。¹⁰⁾ 宗教と強迫性神経症との比較にふさわしい例は、信仰者はほとんど、ある種の神経症的疾患にかかることが

5) 「同書」45—46頁。

6) 「同書」52頁。

7) 「同書」55頁。

8) 「同書」56頁。

9) 「同書」58頁。

10) 「同書」66頁。

ないという事実である。これは、全般的神経症をとり入れることにより、個人的神経症にかからなくなるということである。¹¹⁾ 宗教的な慰藉の作用は、麻酔剤の作用と同じものである。人間は宗教的幻想の慰藉のない場合には、困難な状況にたつであろう。なすすべもない頼りなさ、世界機構のなかでの渺たる存在を承認せざるをえなくなり、もはや宇宙創造の中心でもないし、慈悲ぶかい神の恩寵の対象でもなくなる。それは、温かくて心地のよい生家を見すてた子供の境遇にひとしい。しかし、小児症状は、克服されるべき運命を負っているものであり人間は、いつまでも子供にとどまっていることはできず、いつかは、敵意のある人生のなかへ出ていかなければならない。これは現実への教育であり、この進出の必然性を明らかにするのが、フロイトの書きものの唯一の意図とされる。来世に望みをかけることをやめ、解放された力を、ことごとく地上の生活に集中することにより、人生はすべての人に耐えうるものとなり、文化が、何びとをも圧迫しないという境地に到達できるかもしれない。¹³⁾ なぜならば、子供たちもまた、これに似た神経症をくぐりぬけて成長するものであるから。¹⁴⁾

科学は、多くの貴重な成果をもたらし、宗教の信仰を弱め、さらには転覆の危険にさらしている。科学上の意見の変化は、発達であり進歩なのであって、破綻なのではない。¹⁵⁾ われわれの科学は幻想ではない。むしろ幻想とは、科学がわれわれに与えることのできないものが、どこかほかのところから、手にはいりでもするかのように、信じこむことをいうのである。¹⁶⁾

以上の、フロイトの論述は、宗教否定として受けとられ、多くの人による非難がなされた。その非難にこたえるために書かれたのが、「文化のなかの

11) 「同書」67頁。

12) 「同書」74—75頁。

13) 「同書」76頁。

14) 「同書」80頁。

15) 「同書」84—85頁。

16) 「同書」86頁。

不安」である。

その中で、ロマン・ローランは、フロイトは、信仰心の真の源泉の価値を認めていないとする。それは独特の感情であり、多くの人たちが認めているものであり、「永遠性」の感覚と名づけたと思っているものであり、ある絶対的なもの、無制限なもの、いわば「大洋的なもの」についての感情である。この感情は、主観的なものであり、宗教的原動力の源泉であり、あらゆる信仰やすべての幻想を否定するとしても、こうした大洋的感情にもとづくときだけは、宗教的と呼んでもかまわない。¹⁷⁾

以上のロマン・ローランの主張に対し、フロイトは、自分はこの「大洋的感情」を自分のなかに発見することはできないとする。¹⁸⁾ この感情は、宗教的欲求の源泉と見なされるべきではなく、宗教的態度の起源は、幼時のたよりなさという感情に求められるとされる。

われわれはみんな、どこかで、偏執狂患者と同じように振舞っており、自分に耐えられない世界の一面を、願望を形成することによって修正し、この妄想を現実のなかにもちこんでしまう。多くの人間が、幸福の保証と苦悩の防止を、現実の妄想的変革によって、つくりあげようとする。人類の諸宗教もまた、こうした大衆妄想として特徴づけられる。¹⁹⁾

宗教は、幸福獲得と苦悩防衛の道を、すべての人に同じやり方でおしつけることにより、選択と適応の運動をさまたげている。宗教は、人生の価値をおとしめ、現実世界の姿を幻想風にゆがめているが、それは知性の萎縮を前提としている。精神的小児症をむりやり定着させ、集団妄想のなかにくみいれることにより、宗教は、多くの人間が個人的な神経症にかからずにすむようにしているが、それ以上のものではほとんどない。²⁰⁾

17) フロイト・吉田訳「文化のなかの不安」『改訂版フロイト選集第6巻文化論』日本教文社1980年 4頁。

18) 「同書」同頁。

19) 「同書」32頁。

20) 「同書」37頁。

人間は昔から、全能と全知の理想像をつくりあげていて、それを神々のなかに具象化した。これらの神々は文化理想だったといえる。いまや人間は、この理想の達成にきわめて近づいており、自分が神になりかけている。将来人間は神との類似性を、ますます高めるであろうが、今日の人間は、自分が神に類似していることを幸福だと感じていない。²¹⁾ 以上がフロイトの宗教論であるが、ついで、フロイトとよく対比されるユングの宗教論について論述したい。

3 ユングの宗教論

ユングは、「人間心理と宗教」において、宗教とは、ルードルフ・オットーが、「ヌーミノースム」と呼んだものを、慎重かつ良心的に観察することであるとしている。それは一種の動的な存在ないしは作用であって、恣意的な行為によって惹起されるものではなく、むしろこの作用が主体たる人間をとらえ、かつ支配するのであり、人間はこの作用の創造者でなく犠牲なのである。²²⁾ 宗教とは、ヌーミノースム体験によって変化をとげた意識がとる独得の態度、ないしは方向だといってさしつかえない。²³⁾

心理学者は、個々の宗教のあげている要求ではなく、宗教問題の人間的側面に目を向けるべきである。なぜなら心理学者にとっての関心事は、根源的宗教体験であり、個々の宗派が、それからいかなるものを作りあげているかではないからである。²⁴⁾

ところで、ユングは、ドグマや儀式が、精神衛生の手段としては、重要なものであるとする。患者が、現に教会にかよっているカトリックである場合、彼は懺悔と聖餐拝受をすすめ、これにより、放置すれば、その患者の過重負

21) 「同書」47—48頁。

22) C. G. ユング濱川訳「人間心理と宗教」『ユング著作集4, 人間心理と宗教』日本教文社1969年, 7頁。

23) 「同書」10頁。

24) 「同書」12頁。

担となりかねない直接体験から身を守るようにさせる。²⁵⁾

又、ユングは、「分析心理学」において、宗教とは精神療法の体系であるとしている。精神療法家は、人間の心・精神・魂の苦悩を癒そうとしており、宗教も全く同じ問題を扱っている。したがって、主みずから治療者であり医師なのである。宗教は、きわめて彫琢度の高い精神療法の体系であり、その背後には、偉大な実践的真理が存在している。ここ三十年間にユングがみた患者のなかで、カトリックの信者は六人くらいで、大半はプロテスタントとユダヤ人である。カトリック教会は、ことに告解という宗教的制度や、良心の指導者としての意識において、精神療法の目的にかなっている。²⁶⁾

又、「現在と未来」においても、ユングは、宗教とは、ある目に見えず、制御することもできない要素を、慎重に観察し顧慮することであり、人間に固有の本能的な態度であるとする。その現われは、全精神史を通じてつねに見ることができ、明らかに心のバランスを保つのに役立っているとしている。²⁷⁾

そして無意識との関連についていえば、無意識と呼ばれるものが、神と同一物であるとか、神に取って代わったというわけではない。それは、宗教体験が、そこから発してくると見える媒介者（メディウム）にすぎない。そうした体験の、もっと奥にある原因は何かということになると、人間の認識能力を超えているとする。²⁸⁾

集合的無意識という事実は、あらゆる人種の相違をこえて、脳の構造が同一であることの、心的な表現である。そこから、さまざまな神話のモチーフや象徴の間に見出される類似性、同一性の説明がつく。心の発展のさまざまな方向は、一つの共通な根底から発しており、その根は、あらゆる過去の

25) 「同書」85頁。

26) ユング・小川訳「分析心理学」みすず書房1979年、262—263頁。

27) C. G. ユング・松代訳「現代と未来」『ユングの文明論』思索社 1979年171頁。

28) 「同書」219頁。

発達段階にまで達しており、動物との心的類似さえ存在している。²⁹⁾

「黄金の華の秘密」においても、あらゆる宗教は、魂の苦悩と障害に対する治療であるとし、³⁰⁾ 神に仕えることは、より高い見えざるものや、精神的なものに従うことであるから、非常に意義深く、またよきものに会える展望がもてるとする。³¹⁾ そして、キリストを信ずる人は、信仰をもつのがよい。というのは、信仰とは、彼が引受けた義務であるから。信仰をもたない人は信ずるという恩寵をとり逃した人である。彼は、生れつき呪われているために、信ずることができず、ただ知ることができるだけの人間であり、何か他のものをも信ずることができないとしている。³²⁾

ユングの最後の著作「人間と象徴」において、彼は、人生に意味を与えるのが宗教的な象徴の役割であるとしつつも、現代人の信仰心の変化について記している。³³⁾

現代では、非常に多くの人たちが、信仰を失っている。宗教なしで人生がうまくいっているかぎり、この喪失は気づかれない。しかし、苦悩が生じたときは、人々は解決の糸口を求めようとし始め、人生の意味や、苦痛に満ちた体験について反省し始める。カウンセラーに相談にくるのは、カトリックの人よりも、ユダヤ教やプロテスタントの人のほうが多い。しかしこの科学時代においては、精神科医は、かつては神学者の領域に属していたような問題を問われがちである。人々は、人生の意味ある生き方についてや、あるいは神や不死について絶対的な信仰をもっているだけで、大きな違いになるかもしれないと感じている。死が近づくという恐れが、刺激となりこのような考えをもつにいたる。有史以前から、人類は超越的な存在、あるいは来生に

29) C. G. ユング, R. ヴィルヘルム, 湯浅・定方訳「黄金の華の秘密」人文書院1981年, 39頁。

30) 「同書」90頁。

31) 「同書」73頁。

32) 「同書」92頁。

33) C. G. ユング, 他, 河合監訳「人間と象徴—無意識の世界(上巻)」132頁。

ついでに観念をもっていた。現在においてのみ、人間はこのような観念なしにやっていけると思っている。³⁴⁾

ユングは、信仰は思考を排除するものではないとみなしているが、非常に多くの信仰者が、心理学を含めた科学を恐れるが故に、人間の運命を支配してきた、ヌミノスな心の力にたいして目をつむっている。すべてのものから神秘性やヌミノスがはぎとられた。もはや聖なるものは何もない。³⁵⁾ 助けを求め、祈れる神は存在せず、世界の偉大な宗教は、貧血症にかかっている。助けとなる力は、森や川や山や動物から逃げ去ってしまった。現代人は、宗教を、過去の遺物にうずもれた恥ずべき生活を導くものとして、ばかにしている。現在の生活は、理性によって支配されており、それに助けられて、自然を征服したという幻想にとらわれている。³⁶⁾ 人間は、今日宗教や哲学が、現在の状況に直面するのに必要な安定性を与え、はげましてくれる観念を、用意できないことを知っている。

仏教徒は、人々が仏法にしたがい、真の自我にたいする洞察を得るならば物事はうまくいくだろうというし、キリスト教徒たちは、人々が神を信じさえすれば、よりよい世界をもつだろうという。又、合理主義者は、人々が知的で合理的ならば、すべての問題は解決されるだろうという。しかし問題なのは、問題を自分自身で解決しようとする姿勢を持つか否かなのである。³⁷⁾

しかし一方でユングは、ファシズムについて、以下の如く記している。元型的なイメージの多くのものは、宗教的な性格を有している。ドイツに起こったナチ旋風は、まさしく宗教的な意義をもっているし、ムッソリーニは、まさに宗教的な像である。ファシズムは宗教のラテン的形態であり、その宗教的性格が、それがみな何故に恐ろしいほどの魅力を、もつのかという、疑

34) 「同書」129頁。

35) 「同書」143頁。

36) 「同書」153頁。

37) 「同書」155頁。

間を説明している。³⁸⁾

社会主義的独裁制は、宗教にほかならず、国家奴隷制は、神に対する勤行の一種である。³⁹⁾ 宗教は、つまり魂と個人的な運命の非合理的な要因を、良心をもって顧みる心の働きは、もっとも悪いカリカチュアとなって、今度は、国家と独裁者の神格化のうちに姿を現わした。⁴⁰⁾ 宗教的な活動というものは、本能的な傾向に基づいており、きわめて人間的な機能の一部をなしている。人間からその神々を奪うことは可能であろうが、それは別な神々を与えることにしかない。集団国家の指導者たちが、おのれを神格化せざるをえないのは、そのためである。⁴¹⁾

ユングによれば、フロイトにとっての無意識とは、主として抑圧されたものを容れる容器であり、ユングにとっての無意識は、広大な歴史的な倉庫であるとされる。

4 フロムの宗教論

エーリッヒ・フロムは、精神分析の立場にたつ社会心理学者で、新フロイト派の中心人物の一人であるが、その多彩な研究の中で、宗教に関する考察も行なっている。「精神分析と宗教」において彼は、現在二種類の専門家、すなわち僧侶と精神分析家が魂を問題にしているとして、その相互の関係について論考を試みている。⁴²⁾ まずフロムは、フロイトとユングについて比較を行なっている。それによれば、フロイトは、人間愛・真実および自由という理想や価値が脅やかされると考えたから、宗教批判を行なったとされる。⁴³⁾ 又、フロイトが、無力の感情を宗教的感情と正反対のものであるとのべてい

38) ユング、小川訳「分析心理学」みすず書房1979年267頁。

39) C. G. ユング、松代訳「現代と未来」『ユングの文明論』思索社1979年、170頁。

40) 「同書」173頁。

41) 「同書」200頁。

42) ユング・小川訳「分析心理学」みすず書房1979年、208頁。

43) エーリッヒ・フロム、谷口・早坂訳「精神分析と宗教」東京創元社、1973年、10頁。

44) 「同書」17頁。

るのは、注目すべきことであるとする。⁴⁵⁾

ユングについては、彼が無意識という概念を、宗教的なものと解したとし、その思考論理からすれば、狂気はきわめて顕著な宗教的現象であるとされねばならないとする。⁴⁶⁾

そして、フロイトは宗教の敵であり、ユングはその友であるという一般に流布された意見は、誤った公式化であるとする。フロイトは、人間の発展の目的が、叡智・人間愛・苦悩の解消・独立および責任の成就にあると考えており、それらは、東洋や西洋の文化の基盤であるすべての大宗教の教えの倫理的中核をなしているとする。フロイトは、宗教の倫理的核心的名において語り、その倫理的目的の、実現を阻止しようとする宗教のもつ有神論的超自然的側面を批判しているとみなしている。したがって、フロイトが、反宗教的であるという見解は、フロイトが、いかなる宗教にたいし、また宗教のいかなる面に対し批判的であり、いかなる面を弁護するかを、はっきり見きわめないと誤解をおこすとしている。⁴⁷⁾ これに対し、ユングにとっての宗教体験は、より高い力への屈服という情緒的体験の一種として特徴づけられ、ルッターやカルヴィンの教説にみうけられる、宗教体験の性格描写であるとする。⁴⁸⁾

結論としてフロムは、フロイトは、倫理の名において宗教に反対するが、それは宗教的と名づけてもよい態度であり、これに対し、ユングは、宗教を心理学的現象に解消し、同時に、無意識を宗教的現象へとたかめるとみなしている。⁴⁹⁾

フロムは、宗教を「およそ、一つの集団に共有され、そして各個人に構え

45) 「同書」18頁。

46) 「同書」23頁。

47) 「同書」24頁。

48) 「同書」25頁。

49) 「同書」25頁。

(orientation) の体制と献身の対象とを与える思考と行動との組織一さい」⁵⁰⁾と定義して論を展開している。フロムによれば、神経症は、個人的な宗教形態であると解釈できるし、もっとはっきりいえば、公に認められた宗教様式と抵触する、原始的宗教形態への退行といえりとされる。⁵¹⁾ 又宗教的祭儀と神経症との重要な相違は、そこで得られる満足が、宗教的祭儀の方が神経症よりもはるかにまさっているところにあるとされる。⁵²⁾ フロムは宗教の区分として、権威主義的宗教と人道主義的宗教という概念を提出する。⁵³⁾ 権威主義的宗教とその宗教体験の根本要素は、人間を超越する力に対する屈服という点にあり、最高の善行は服従であり、根本の罪は不服従である。又、神は力と権力との象徴であり、無上の力をもつゆえに至高であり、人間はまったく無力であり、カルヴィン神学は、その典型としてあげられる。⁵⁴⁾

これに対し、人道主義的宗教は、人間と人間の力とに集中し、最大の力を達成し、自己実現が目的である。その例証として、初期の仏教・道教・イザヤ・イエス・ソクラテース・スピノザの教説・ユダヤ教やキリスト教におけるある種の傾向（とくに神秘主義）・フランス革命の理性宗教などがあげられる。⁵⁵⁾ 権威主義的宗教においては、悲哀と罪惡の気分が濃厚であり、人道主義的宗教では、喜びの感情が顕著である。⁵⁶⁾ 人道主義的宗教においては、神は人間のより高い自己の像であり、人間の可能な姿の、また人間になるべき姿の象徴であり、権威主義的宗教では、神は本来人間のものであった理性や愛の唯一の所有者であり、神が完全なものになればなるほど、人間は不完全なものになる。⁵⁷⁾

50) 「同書」30頁。

51) 「同書」37—38頁。

52) 「同書」43頁。

53) 「同書」46頁。

54) 「同書」47—48頁。

55) 「同書」49頁。

56) 「同書」49頁。

57) 「同書」62頁。

人道主義的宗教のもっともよい例の一つは初期の仏教であり、禅宗は、もっと徹底的な反権威主義的態度を示している。⁵⁸⁾ 又ユダヤ教やキリスト教においては、権威主義的なものと、人道主義的なものとの二つの原理があるとされる。

宗教に関する精神分析的操作は、思想体系の背後にある人間の現実を理解することを目ざしており、そのような視点からするならば、釈迦やイザヤやキリストやソクラテースやスピノザの教説は、愛と真理と、正義を追求するものとしての同一性を示している。これに対し、カルヴィンの神学体系と、権威主義的政治組織の背後にある人間の現実、権威への屈従の精神であり、個人への愛と尊重とをもたないとされる。⁵⁹⁾

ついでフロムは、精神分析には、社会的適応を目標とするものと魂の治癒を目標とするものがあるとする。⁶⁰⁾ 宗教的ということ、人道主義的諸宗教の根本的な教えに共通にみられる態度とするなら、適応性治療でなく、魂の治癒を目的とするものこそ、宗教的機能をもっているといえる。批判的な自己評価と、その結果えられる体験の真否の弁別力とが、宗教的態度の本質的要素であるという見解は、仏教のなかにみいだされるが、これは、精神分析の基本的目標でもある。さらに、真実をもとめる人間の能力は、自由および独立の獲得ということと密接な関連をもつ。

フロイトは、エディプス・コンプレックスが、あらゆる神経症の核心であると説いたが、フロイトの発見は、たんなる性の側面での解釈から、人間相互の関係という一般的なものへまで広げることにより、初めて十分な意義をもつ。⁶¹⁾ 人類の発展は、近親相姦から自由への発展である。大多数の人々は、神経症的な人より早く、独立へのたたかいを放棄しているから適応している

58) 「同書」52頁。

59) 「同書」78頁。

60) 「同書」84頁。

61) 「同書」100—101頁。

のであるにすぎず、人間としての目的実現という観点からすれば、より病的といえる。⁶²⁾ 予言者の教えの中心点は、近親相姦的礼拝にかわるものとして、真実・愛・正義を説くことにある。人は、近親相姦的紐帯をのり越えることによってのみ、自己の所属する集団に対して批判的でありうる。⁶³⁾ 神経症患者は愛の能力がなく、分析的治療とは、本質的には患者に愛する能力を得させ、あるいは回復させることである。ただし、ここでいう愛の意味は、他の人への関心・責任・尊敬および理解などを経験的にもちうる能力、ならびに他の人の成長を願う強い気持という意味であるとされる。⁶⁴⁾

ついで、フロムは、魂の精神分析的治療の目標は、権威主義的意味でなく、人道主義的な意味で宗教的とよばれるような態度を、患者の中につくりあげ、それにより患者に真実を見、愛し、自由で責任をもち、良心の声に敏感な能力を獲得させることにあるとする。⁶⁵⁾ さらに、宗教的なものと倫理的なものとの相違は、大部分は認識論的なものにすぎないとする。

フロイトにとって無意識とは、本質的にはわれわれの内にある悪いもの、抑圧されたものであり、ユングの体系においては、無意識は啓示の源泉となる。ユングの見解によれば、無意識の命令に隷属しているという事実そのものが宗教的現象とされる。⁶⁶⁾ これに対し、フロムにとっての無意識は、もっとも低いものともっとも高いもの、最悪のものと最善のものとを共に含んでおり、それに対し、深いユーモアの感覚をもって、恐怖や畏敬の念なしに近づかなければならないとされる。⁶⁷⁾

精神分析は宗教をおびやかすか否かについてフロムは、宗教の体験的側面、科学的・呪術的側面、儀礼的側面および語義学的側面について論じている。

62) 「同書」104—105頁。

63) 「同書」106—107頁。

64) 「同書」109頁。

65) 「同書」116—117頁。

66) 「同書」120—121頁。

67) 「同書」121頁。

大宗教の教祖たちの教説に共通の態度は、生きることの最高目的が、人間の魂への関心であり、また人間のもっている愛と理性の力を展開することにあるということであり、精神分析は、その実現に多くの貢献をなしうる。⁶⁸⁾ 又、宗教的態度をおびやかすのは科学のうちではなく、日常生活を支配している慣習のうちにある。とくに現代人の「市場的構え」がもっとも危険なものであるとする。⁶⁹⁾

宗教の科学的・呪術的な面との衝突という点に関していえば、東洋の大宗教は、人間を問題にする宗教の職分と、自然の解明を企図する側面とを鋭く区別する傾向をもっていた。又、精神分析家が、儀礼の理解という点で為しうる貢献は、儀礼行為を求める欲求の心理学的な根拠を示すこと、強迫的・不合理的な諸儀礼と人間のいまだく諸理想への共通の献身を表現する諸儀礼とを区別することである。⁷⁰⁾

語義的な面についていえば、宗教は、儀礼においてのみならず教説においても、象徴言語で語る。象徴言語の本質は、思想とか感情とかの内的な諸経験を、感覚的な経験のように表現するところにある。宗教的象徴に関する理解の基礎は、フロイトによって据えられたが、象徴言語に関しての理解は、宗教が象徴言語で表現したものの、新しい評価に導いた。

宗教の問題は、神の問題でなく人間の問題であり、本当の衝突は、神を信ずることと、無神論との間にあるのではなく、人道主義的な宗教態度と、偶像崇拜と呼ぶべき態度との間にある。⁷¹⁾ そして、われわれは、偶像否定において、共通的な信仰をもちえ、より深い謙遜と人間愛とを見出すと、⁷²⁾ フロムは主張している。

68) 「同書」126頁。

69) 「同書」127頁。

70) 「同書」138頁。

71) 「同書」144頁。

72) 「同書」149頁。

5 むすびに代えて

フロイトとユングの宗教観は、一般にいわれるように大きな差異を示しているが、一方では共通する点も有している。二人の無意識の位置づけの差異が、宗教観の差異に反映されているが、そのみが原因ではない。フロイトにとっては、反宗教とは、反ユダヤ教であるとともに、反キリスト教であったとされる。⁷³⁾ ユダヤ教の律法主義に対する反発と、ユダヤ人を迫害するキリスト教に対する反発がフロイトに「幻想の未来」等を書かせたといえる。したがってフロイトの宗教論は、限定された宗教に対する見解を、宗教一般に普遍化させたものといえる。

これに対し、田舎のスイス改革教会の牧師の子として生れたユングは、宗教的な環境に育ちつつも、それに満足できなかった。その結果として、ストーリーにより「ユング心理学の大部分は、自分の育てられた、しかしまた、ごく幼い時から反感を感じはじめた正統派の信仰に代わる物を見いだそうとする、ユングの試みの一部として見ることができる」⁷⁴⁾といわれる事態が生じた。

フロイトは、宗教を幻想であるとみなしているが、信仰者はほとんど、ある種の神経症的疾患にかからないという事実を指摘している。これは、ユングの宗教とは、精神療法の体系であるという主張とあい通じる点をも有しているという見方もできる。又、フロイトは、現代において、宗教は、昔にくらべて、影響力も、信じる価値も低下してきているとしているが、ユングも現代人の中で、宗教なしでやっていけると信じる者が多くなり、世界の偉大な宗教は、貧血症にかかっていると指摘している。しかしながら両者の差異は、フロイトが科学主義の立場に立つのに対し、ユングは宗教的な活動というものは、本能的傾向に基づいており、人間から神々を奪うことは、別な神々を与えることにしかならないと主張している点にある。

73) 小此木・河合「フロイトとユング」思索社1981年47頁。

74) A. ストー、河合訳「ユング」岩波現代選書1980年6頁。

ユングは最近、日本においても、欧米においても大きな関心をもたれてきているが、それは、フロイトの主張した科学主義が、現代人にとって信奉しがたいものとなってきていることと関連がある。現代では、欧米において中心的な役割を果たしてきた自然科学的な世界観、および正統的なキリスト教の信仰のいずれもが、根本的な反省をせまられており、それが故にユングに対する関心が高まっているのである。⁷⁵⁾ ユングは、正統的クリスチャンではなく、東洋の宗教に対する深い理解を示しているが、それを信奉しているのではない。彼は、やはり西洋文明の中の人間なのである。しかし、彼の心理学の根本概念自体が、東洋の宗教の影響のもとに成立しており、それが故に、我々に親しみやすい側面を有しているといえよう。

さらに、ユングとフロイトの心理学の差異は、患者の年代の差異が関連している。ユングは、人生の前半における個人の課題は、自分を確立し、両親と結びつけている幼児的な絆を断ち、配偶者を得て新たな家庭を形成することにあるとみなしていた。これは、フロイトが、目標としたことと同じであるといえる。ところが、ユングが提示した個性化という過程は、人生の後半に生じるものであり、しかも少数の者しか関係しないものであった。ユングの患者の多くは、社会的に適応しており、人生の無意味さや無目的に苦しめられている者であり、人生の後半にいる人たちであった。彼の患者の多くは、知的で成功している人であり、自分の存在の意味を知り死に対する心の準備をすることを目標とする人たちであった。その過程の最終目標は、統合された個人になることであり、自分自身のもって生まれた人格を完全に発達させることである。⁷⁶⁾ このような過程は、宗教的といえるものであり、ロロ・メイも、宗教の重要性を指摘している。彼は、フロイトの宗教批判にふれ、たしかに、人々の中には、自分自身を中途半端な発達段階に固定する手段とし

75) 「同書」194—195頁。

76) 「同書」119—140頁。

て、宗教を利用しているものがあり、神経症的な人によって把握される場合には、文化のあらゆる側面が、そのように使用されるとしている。科学は、人間の根本的な不安感を補償しようとする努力の顕著な例とされる。というのは、予測不可能な人生に圧倒されている人は、実験室に逃避し、そこで、分析を手段として人生の力を征服し、安全な天国にいたいと思ひ込もうとする。

「このような宗教の『悪用』こそ、まさに、フロイドが攻撃しているものである。このような意味においてフロイドは正しかったし、われわれに有益なことを多く教えている。しかし、真の宗教、つまり、人生の意味に対する根本的な肯定というものは、それがなければ人格上の健康を保つことができる人間はいない、といわれるほど重要なものである。」⁷⁷⁾

フロムについて言えば、フロイドとユングに関する考察は、フロムの立場を明確にしているのであって、前二者に対する正確な把握とはいえない点がある。又、フロムは、人道主義的宗教を高く評価し、初期の仏教を、そのもっともよい例とし、禅を反権威主義的態度を示すものの代表としているが、仏教のもつ多面性を正確にはつかんでいないように思われる。又、愛・真理・正義などという用語を用いているが、社会科学においては、より慎重な用い方をする必要があると思われる。さらに、宗教的なものと、倫理的なものの差異と同一性に関しては、より一層の考察が必要といえよう。全体に、フロムの論述は、かなり強引に自己の分析視角の限定のもとになされているが、文明批評的であり、ユングのもっているような、深みと重厚さに欠けるという感がいなめない。しかし、フロイトと比較するならば、多くの宗教に関する考察がなされており、その点において評価すべきといえる。

フロイトにしる、ユング・フロム・さらにロロ・メイにしる、宗教に関する見解の差異は、宗教をいかに定義し、宗教のいかなる点に注目するかによって生じてきているといえる。したがって、どの見解が正しく、どれが誤っ

77) ロロ・メイ、黒川訳「カウンセリングの技術」岩崎学術出版社1977年、239—240頁。

ているかというような考察は、あまり意味がないと思われる。しかし、深層心理学と宗教という課題は、筆者にとってきわめて魅力的なものであり、研究を継続して行きたいと思っている。